



TITLE:

quand節に現れる半過去 --談話的
時制解釈モデルによる分析(
Digest_要約)

AUTHOR(S):

高橋, 克欣

CITATION:

高橋, 克欣. quand節に現れる半過去 --談話的時制解釈モデルによる分析. 京都大学, 2014, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2014-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18602>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

学位論文の要約

quand 節に現れる半過去—談話的時制解釈モデルによる分析（高橋 克欣）

本論文では、フランス語の時を表す副詞節である **quand** 節に現れる半過去の解釈メカニズムについて論じた。序論では半過去のさまざまな用例を概観した後、本論文における考察の対象である **quand** 節において半過去が用いられる際の問題点を確かめた。岩田(1997)や西村(2011)などの先行研究では、過去における習慣や反復を表す場合を除くと、**quand** 節に現れる半過去の多くは年齢を表す **avoir** や人生の一時期を表す **être** であり、その他の動詞が用いられることは稀であると述べられている。そして進行中の事態を表す半過去を **quand** 節の中で用いると不適格文になると説明されている。

(1) ?? Quand je me promenais dans la forêt, j'ai vu un ours.

[When I was taking a walk in the forest, I saw a bear.]

(2) ?? J'ai vu un ours quand je me promenais dans la forêt.

[I met a bear when I was taking a walk in the forest.] (岩田 1997)

しかし文学作品などにおいて、進行中の事態を表す半過去が **quand** 節の中で用いられることがある。

(3) Et tout à l'heure, quand nous traversions cette esplanade, de l'autre côté du boulevard de Sébastopol, j'ai pensé : « C'est ici que finira ton aventure. »

[And just now, when we were crossing this esplanade, from the other side of the Sebastopol boulevard, I thought: "It's here where will finish your adventure."]

(Patrick Modiano, *La ronde de nuit*)

そこで本論文では、先行研究において **quand** 節の中で用いられることが多いと言われている人生の一時期や年齢を表す半過去だけでなく、先行研究では詳しく論じられて来なかった半過去についても適用可能である統一的な説明原理を示し、どのような場合に **quand** 節の中で半過去を用いることが可能となるかという問題について論じた。

第 1 章では **quand** 節の中で用いられる半過去について論じた先行研究を概観し、先行研究における考察の範囲が文単位に留まっているため言語現象を適切な形で捉えることができていない点を批判した。次に、半過去の特長である「未完了性」につい

て考察し、動詞の語彙的意味特性の違いにより未完了性の具体的な現れ方が異なり、半過去によって表される事態の成立・不成立の判断も異なることを確かめた。その結果、文単位の考察のみによって **quand** 節に現れる半過去の用例を適切な形で説明することはできないことが明らかとなった。本論文では半過去の「非自立性」に着目し、**quand** 節に現れる半過去の問題を考察する必要があると考える立場を取る。半過去は非自立的であるため単独では解釈を行うことができず、談話解釈上利用可能な他の要素を参照することではじめて解釈が可能となる。したがって、半過去が関わる問題を論じるためには談話構築にかかわる様々な要素を考慮し、談話的な観点から時制の解釈を捉える必要があるという観点から、本論文における仮説を提示した。

第 2 章では半過去の「非自立性」に着目し、半過去によって表される事態がどのような形で談話時空間内に定位されるかを説明するための説明概念である「談話的時制解釈モデル」を示した。談話的時制解釈モデルにおいては、全ての時制形式が事態を談話時空間内に定位する機能を持つと考える。自立的な過去時制である単純過去や複合過去による事態の定位メカニズムである「投錨」とは、事態を時間軸上に直接位置づけることをいう。それに対して、非自立的な過去時制である半過去は事態を直接時間軸上の特定の位置に結びつける機能を持たない。半過去による事態の定位メカニズムである「係留」は、当該の事態と談話解釈において利用可能な何らかの要素によって構築される「母時空間」との間に「部分—全体」の関係が成立することで実現される。半過去による事態の「係留」には、談話解釈において半過去に先行して現れる他の自立的な過去時制が関与する場合、発話状況に属する非言語的情報が関与する場合、話し手と聞き手の共有体験が関与する場合などがあるが、それぞれの場合について具体例に基づき半過去の係留メカニズムを説明した。談話的時制解釈モデルによって明らかとなる半過去の係留メカニズムによれば、談話解釈上半過去に先行する要素に対して係留を行い場面を特定することができれば、**quand** 節の中で半過去を用いることが可能となることを説明することができる。

第 3 章では談話的時制解釈モデルを用いて **quand** 節に現れる半過去の解釈メカニズムについて論じた。半過去の解釈において「部分—全体性」が成立するという一般的な特性に基づき、半過去によって表される「部分」としての事態が「全体」の中で占める相対的な位置が定まれば、**quand** 節の中で半過去を用いて場面の特定を行うことも可能となる。本論文では「部分—全体スキーマ」という概念を用いて、半過去によって表される事態による相対的な場面特定のメカニズムを説明した。「部分—全体スキーマ」の構築にはさまざまな談話的な要素が関与する。先行研究でも言及されることが多い「人生の一時期」や「年齢」を表す半過去の解釈においては、我々の世界に関する百科事典的知識に基づき「部分—全体スキーマ」が構築され、場面の特定を行うことが可能となる。また文学作品においては、「スクリプト」と呼ばれる一連の事態連続に関する我々の共有知識や言語文脈を参照することで「部分—全体スキーマ」が

構築され、物語の母時空間において半過去によって表される事態が占める相対的位置が定まると場面の特定を行うことが可能となる。さらに、話し手と聞き手の共有体験に言及することで、話し手と聞き手が共有するシナリオに基づいて「部分—全体スキーマ」が構築され、半過去による場面の特定が実現されることもある。第 3 章におけるさまざまな具体例の分析を通じて、談話的時制解釈モデルを用いると **quand** 節に現れる半過去に共通する解釈メカニズムを統一的な形で説明することができることを示した。すなわち、我々の世界に関する共有知識や話し手と聞き手の共有体験、そして言語文脈を参照しながら「部分—全体スキーマ」が構築され、半過去によって表される事態の相対的な位置が定まることで、半過去が用いられた **quand** 節によって場面を特定することが可能となるのである。

第 4 章では、談話的時制解釈モデルを用いて逆従属構文の解釈メカニズムを説明した。西村 (2011) では、**quand** 節の中で半過去を用いることはできないので、半過去を主節に置き、後続する **quand** 節の中で複合過去や単純過去を用いる必要があると説明されている。このような構文は逆従属構文と呼ばれるが、逆従属構文において主節に現れる半過去は、後続する **quand** 節の単純過去や複合過去に対してではなく語りの母時空間に対して事態を係留すると考えることで、**quand** 節の事態が主節の事態から切り離され予想外の事態が出現したという意外性の意味効果が生み出されることを適切な形で説明することができる。

結論では各章で論じたことをまとめ、本論文における説明概念である談話的時制解釈モデルを用いると、**quand** 節や逆従属構文に現れる半過去の解釈に対して個別の説明原理を指定しなくても、半過去の一般的な解釈メカニズムに基づき統一的な形で説明を行うことができることを具体例の分析によって示すことができた点を確認した。さらに本論文の課題として、主たる考察の対象が **quand** 節に現れる半過去に限られている点を指摘し、談話的時制解釈モデルの有効性を示すためには、本論文では扱うことができなかったその他の半過去の用例についても考察を深めていく必要があることを述べた。本論文においては考察の対象が限定的ではあるものの、一見すると例外的と思われる現象に着目して考察を深めることで、半過去による事態の定位メカニズムの解明という本質的な問題に迫ることが可能となることを示すことができた。また、個別の説明概念を用いるのではなく、半過去による事態の定位メカニズムという、より一般性の高い概念を用いて言語現象の説明を行うことができた。

したがって本論文では、先行研究において適切な形で示されることがなかった **quand** 節に現れる半過去の解釈メカニズムに対する統一的かつ明示的な説明原理を明らかにすることができた点、そして逆従属構文において主節に現れる半過去の解釈が後続する **quand** 節に現れる過去時制ではなく、文脈上設定される語りの母時空間に対して係留するという考え方を示した点において、従来の学説に対して新たな知見を加えることができたと言えることができる。